

論文題目：語用論的観点から見たドイツ語存在表現 — *es gibt* 構文の分類と用法を中心に —
(論文内容の要旨)

本研究では、あらゆる言語表現の中でも、何らかの事物の存在について言及する存在表現に着目する。なぜなら、存在について言及するために、多くの言語が特定の表現を備えており、日常的な言語使用の場では、その一つの表現に対して多様な用法を観察できるからである。そうした存在表現の意味解釈には、複数の形式的・意味的要因が絡み合っており、そのうえ、発話状況に依存して語彙や構文の使用の適切さに違いが見られる。

本論の目的は、ドイツ語存在表現の統語的・意味的特徴を把握するとともに、語用論的観点から、存在動詞や存在構文を含む表現の用法を分類し、それらの使用状況を解明することにある。本研究では「存在表現」(existentials) という用語に対して、「何らかの事物の存在を示す言語表現」という定義を与えている。存在表現は、事物の所在や実在について言及したり、できごとの出現を表したりする。たとえば、「所在文」や「出来事存在文」などである。そうした用法に加えて、話し手は、存在表現を通じて、現実には存在しないことを伝えることができる。そうした発話は「実在文」を用いることによって可能となる。さらに、存在表現の助けを借りて、談話に新しいトピックを導入したり、場合によっては、聞き手の注意を喚起することもできる。本論では、先行研究を踏まえ、そのような表現を「新情報導入的存在表現」や「リマインダー的存在表現」と呼んでいる。このように、わたしたちが存在表現の日常的な用法に目を向けるとき、存在表現は、ある事実の単なる記述としてだけでなく、人間のコミュニケーションを円滑にする手段として出現する。本論での議論を通じて明らかにしたいのは、ドイツ語と他の言語の存在表現が共有する特徴とドイツ語存在表現に特有の言語的性質である。

本論では、ドイツ語存在表現を分類し、その用法を示すことを通じて、ドイツ語存在表現の全体像を明らかにすることを試みた。その際、コーパス調査やアンケート調査を手がかりにして、存在表現の日常的使用に論点を絞り、多様な存在表現の用法について考察した。

本論全体は、五章から構成されている。はじめに、第一章では、ドイツ語存在表現研究の意義について述べ、本論の中で対象とする存在表現を定義した。ドイツ語で存在を言及する語彙やその特徴を挙げた。たとえば、ドイツ語の存在表現には、sein (Engl. be) 動詞や liegen (Engl. lie), stehen (Engl. stand), sitzen (Engl. sit) などの所在動詞、sein 動詞を用いた *es ist/sind* 構文、動詞 geben (Engl. give) を用いた *es gibt* 構文といった非人称存在表現、stattfinden (Engl. take place) のような存在動詞を使う表現などの多様性があることを確認し、その中でも *es gibt* 存在表現を考察の中心に据えることを示した。

第二章では、存在表現に関する先行研究を概観した。まず、ドイツ語存在表現に関する先行研究を示し、先行研究で扱われている非人称存在構文の分類について議論した。これまで

の存在表現に関する研究では、副詞句の有無などによる統語的な区別、実主語の抽象的性質に基づく冠詞の分別からの考察が中心であった。Duden (2015), Hammer (2011), Lenz (2007), Pfenninger (2009) などのドイツ語存在表現に関する先行研究でも、その分類が示されており、たしかに構文の機能についても説明が与えられているにもかかわらず、それぞれの機能がどのような要因によって決定されるのかを十分に明らかにしているとは言えない。その際、統語論的・意味論的レベルでは、ドイツ語存在表現の特徴が十分に明らかにされつつあるものの、語用論的観点からの分析が不十分であることに一因があることを指摘した。

第三章では、ドイツ語存在表現分類と用例について論じた。ここでは、主に、Sweetser (1990) での内容・認識・言語行為領域の概念、および Lakoff (1987) の存在表現の分類に鑑み、「記述的存在表現」と「認識的存在表現」の区分を提案した。記述的存在表現に分類されるのは、所在文、眼前描写的所在文である。他方、認識的存在表現は、主観的存在表現とコミュニケーション的存在表現に細分され、さらに、実在文、未来的存在表現、不定詞的存在表現、限量的存在表現、新情報導入的存在表現、リマインダー的存在表現、リスト的存在表現に分けられた。ただし、所有表現として理解される所在文やリマインダー的に用いられる眼前描写的所在文などの用例も散見され、いくつかの表現に対しては、境界事例が存在することも確認された。

第四章では、コーパスおよびアンケートを利用して、ドイツ語存在表現の使用実態を調査した。その際、書きことばと話しことばの相違を念頭に置き、はじめに、コーパス調査を通じて、書きことばにおける存在表現の特徴を観察した。さらに、アンケート調査から、特にスイスドイツ語における存在表現の日常的使用を吟味し、スイスドイツ語には、*es gibt* 構文と方言的な異形である *es hat* 構文との用法的対立があることが示された。

第五章では、第三章での存在表現の分類を踏まえ、ドイツ語存在表現の各特徴について議論した。はじめに、ドイツ語存在表現に対して語順の違いが及ぼす影響を調べ、テキストにおける存在表現、とりわけ *es gibt* 構文の出現位置について論じた。さらに、存在表現を副文へ挿入できるかどうかが存在表現の実在読みを可能にするかどうかに影響を左右していることを確認した。加えて、表現内での否定詞もしくは疑問形の使用が存在表現の認識的解釈を強めることを見た。つづいて、存在表現の意味決定について、意味的観点から重点的に考察し、特に、定性と新情報、実在的メタファー、直示性、時制、そしてモダリティなどのトピックについて確認した。存在表現の意味を考察するうえで、これらの意味的要素を把握することを欠かすことはできない。とはいえ、そうした意味論的考察だけでは限界があることも明らかになった。中でも、存在表現に含まれる要素の指示性や直示性を論じる際には、前後の文脈や発話状況を考慮に入れる必要があることが示唆された。最後に、存在表現の多義性と語用論的曖昧性について論じた。*es gibt* 構文の意味解釈の揺れを説明する際には、語彙的な多義性から意味を判別できる所在動詞とは違って、表現が使用される文脈や発話状況を十

分に考慮する必要があることが示された。特に、存在表現と直示的要素を備える名詞句や副詞句が共起するとき、それらの指示性がきわめて高かったとしても、内部照応的使用に限られることを主張した。

本論の基礎にある言語観は、実際の言語使用では、話し手と聞き手、あるいは、書き手と読み手のコミュニケーションが前提とされている場合、ある語や構文の意味を、それを含む文脈から独立して特定することは困難であるということである。したがって、本論におけるドイツ語存在表現、とりわけ *es gibt* 構文の研究の中で最も重要なのは、存在表現の意味解釈における構文と文脈の不可分性を示すことにある。今後の研究では、コーパスやアンケート調査を通じてさらなる用例収集を進め、ドイツ語の言語使用の実情を明らかにすること、ドイツ語存在表現の歴史の変遷を記述することを課題としている。